

橋樑著

中國革命史論

本書は『支那社會の研究』支那思想の研究』によつてひろくわが學界に貢献し、中國の庶民生活の面から官紳層や儒教の立場からでなく中國の社會・道教思想を研究し、とくに社會經濟構成の特質という角度から、現代中國の研究をおしすゝめた（本書・平野義）著者が、常人には利用し難かつた豊富な資料を駆使し、主として雜誌「滿蒙」その他「東亞」「新天地」に發表した中國革命に關する諸論文を、大塚令三氏外數氏が、標題その他に若干補訂をほどこし集録したものである。主として孫文の死（一九二五年）後から一九二九年に至るまでの間の一即ち國民黨が、一方では左右兩派の分裂をはらみつゝ、他方では中共との合作が完全な分離に移行し、右派の領導の下に中國革命の一應のヘゲモニーを握るに至つた一めまぐるしい革命史の諸過程が取り扱われている。周知の様に此の數年間、中國民主主義革命史の上で極めて重要

な時期であつた。一九二六年七月一日、北方諸軍閥に對し國共合體革命軍が北伐行動を起して廣東を出發してより、僅か八ヶ月の間に揚子江以南の諸省に青天白日旗がひるがえり、武漢が革命の中心となつた。廣東・湖南・湖北等の諸省に夫々數百萬以上の農民が組織され、郷紳地主階級への反抗と闘争が活潑に展開された。漢口・九江の英人租界は民衆の力によつて奪回された。上海の組織労働者（總工會）は中共指導の下に孫傳芳軍に果敢に對抗しつゝ市政の實権を握つた。武装されたプロレタリア・農民・民族ブルジョアその他が一丸となつて、帝國主義・軍閥・地主階級に對抗したのである。革命の波は世界の帝國主義を驚かせつゝ高潮した。——中國革命史上武漢革命時代とよばれる時期である。

だが一九二七年四月十二日の上海に於ける蔣介石のクーデター（労働者共產黨員の虐殺）次いで南京政府の成立、武漢に於ける國共分裂（一九二七年七月）武漢政府の南京政府への屈服等々の諸過程を経て革命陣營は決定的に分裂した。——國民黨の側から

云えば一應の覇權かくとくの時期であり、共產黨の側から云えば革命運動の退潮期（實はかの南昌暴動・八七會議・四省秋收暴動・海陸豊ソヴェエトの成立・廣東コムニエーションの勃發等の諸事件を経て各地に労働者農民のソヴェエト政府が成立し所謂李立三コースに連續する時期であると共にそれが克服され、その試練の中から毛澤東コースが育つて來た時期）である。本書はまさにかゝる時期を対象として取り扱う。

本書の内容については、本書が編まれるに至つた諸事情や、著者の中國革命に關する他の著作と共に、大塚氏の解題（卷末）に詳しく紹介されているから、こゝで改めて述べる必要は無いと思う。たゞ、今述べて此の時期の重要性を考慮に入れつゝ、一、二の基本點に就いての著者の考えを紹介し、批判し、併せて今後の中國革命史研究に對して此の書の與えるものを私なりに描き出したい。

此の時期に至る、及び此の時期の中國革命の本質をどの様に著者は把握したか。又著者の中國革命に對する基本的立場は如何

なるものであつたか。

中國は「ヨーロッパに比較すれば、所謂産業革命以前の狀態に」（五九頁）或いは「中世紀的農業經濟の段階に停滞し」（四六頁）官僚なる貴族階級と庶民階級との對立があるにすぎない。（此の見解は一九二六年當時のものであるが、他方、一九一六年以後中國の産業革命が加速度的に進行しているとは、「支那社會研究」以來の著者の考へであり、本書に於ても、三八〇頁に述べられている。この矛盾した考へについては今は觸れない。）前者は官僚貴族階級は、軍閥・官僚・土豪・勞働者によつて構成され（一〇五頁、一〇二頁）後者は庶民階級は小資産者と無産者から成り立つ。（四六頁）或いは匪徒を覇者とする貧民と、農村及びギルド組織に依存するところの中産者から成り立つ。（六四頁）中國革命は後者の前者に對する闘争即ち「庶民革命」に外ならぬ。一〇二頁）（庶民革命の定義については九三―四頁参照）

しかし一方、此の庶民革命の進行中に新興資産階級が擡頭して來る。地主土豪

階級は、「錢莊・當舖の外に、穀物間屋・榨油及び製粉工場・吳服雜貨と言ふが如き地方商工業企業の大規模な」ものへの獨占的出資者である。（九八頁）。これのみでは新興資産階級とは云えぬが、「農産物の輸出貿易と云ふ新しい經濟事實が發生すると從來とは比較にならぬ程その取扱が大衆的となり且つ敏速正確を要するに至る。一層徹底的な變化は取引が開港場に大きく集中されることである。田舎に局限されて居た

郷紳、即ち地主土豪の經濟的機能は右の變動の經路に沿うて農村から都市へ、都市から開港場へと溢れ出す。是に於て彼等は自ら知らず且つ望まざる間に、所謂新興資産階級の構成員たる名譽を擡う譯である。」（九八―九頁）。彼等「商業化した地主・土豪」は所謂大買辦階級と共にブルジョアジに屬する。（一〇〇頁）そしてかゝる新興資産階級を中心勢力とする革命運動も今日（一九二七年）のシナはたしかに可能であり、それが庶民革命の合理的な一方に外ならぬ。（一一〇頁）

この一九二七年八月當時の中國革命の性

質に關する著者の考へは翌二八年當時を「單純資本主義革命」と規定する次の基本的な考へにつながる。

即ち北伐完成は、國民革命（庶民革命―里井）の二大精神たる打倒軍閥と打倒帝國主義との抛棄を意味し、中國ブルジョアジーが「一方では軍閥、他方では帝國主義の支援なしには、自己の存在を續け得ない程微弱」であることを示すが（三頁）しかもその弱さは今日までの所「そうなのであり、今後（二八年より見て）その財力によつて軍閥は克服されるし（三頁）帝國主義による深刻なる半植民地化も、「關稅自主權の獲得によつて或る程度の自由を得る」（六頁）。これが氏の「單純資本主義革命」の規定なのである。

所で右の見解を發表してから六年後の三四年に、「私は自由主義者であつた。それと同時に、私は自由主義の母胎たる資本主義を否定する志向に強く支配されていた」と述懐している（「解題」四―一頁）著者は二八年すでに次の様な立場を明示している。

中國革命のコースは、此の單純資本主義革命では終りを告げない。明日の革命の過程はブルジョア中心の諸過程の行き詰りを出發點とする。何故なら「打倒帝國主義」なるスローガンを關稅自主權の回收という生溫いものとは夢にも考えない中産者・勞農大衆、及び軍閥紳階級によつてブルジョアジー以上に壓迫を受けつゝある大衆の不満が早晚爆發するに違いないからである。(九十一頁)然らば明日の「國民革命の擔當者」は誰か。ブルジョアジーでは勿論無い。惡質にして反社會的な「ルンペンプロレタリア」を唯一の頼みとする無産階級、共産黨でもない。それは、孫文の民生主義及び「中國實業發展計劃」を中軸とする國家資本主義的プログラムを實行しつゝ資本家・中産者及び勞農大衆をその傘下に集め得る所の小資産階級だと著者は云う。(一二三頁)これが中國革命への著者の見透しであると共に、中國革命に對する著者の基本的立場に外ならない。一九一八年當時の孫文のプログラムが著者の理想であり、小資産階級(それが政黨から云え

ば、國民黨改組派であることは本書を讀めば明らかである。特に三七〇頁、そこでシナでのみ獨立した政治勢力たり得る小資産階級政黨、改組派の力が他階級とはきわたつて高く評價されている。)が著者の考察の階級的基礎である。

重ねて云う、庶民革命から新興ブルジョアジーを中心勢力とする單純資本家革命へこれが著者の當時の中國革命への規定であり、單純資本主義革命を前向きに推轉せしめる小資産階級、これが中國革命に對する著者の基本的立場、視角であつた。

本文四〇七頁にわたる本書は、要約して云えば以上の規定・視角に立つて、めまぐるしく變轉する革命・反革命期の諸情勢・諸勢力(新舊軍閥・國民黨左右兩派、そして共産黨)を分析、批判したもの以外ならない。特に第四章その他の中國共産黨の理論と方略への批判が主題となつている。こゝで著者の分析と批判とを再批判す可きだが、紙數に制限された今、一つのその緒口のみを述べるにとゞめざるを得ない。

中國革命は(他の植民地化・半植民地化

された凡ての諸民族のそれと同様)民主主義革命であると共に帝國主義と決定的に對抗しこれと闘う民族解放運動であり、それが中國近代革命の最大の基本線である。云い換へれば帝國主義と妥協し、これに屈服する階級は革命勢力たり得ず、又かゝる階級に領導される革命は、その階級が如何に革命なりと叫んでも革命ではない。一九二四年一月の第一次全國代表大會で、帝國主義反抗を宣言しながら、「打倒帝國主義」を拋棄し北伐に一應の勝利を得た國民黨右派政權は此の點だけでも決して革命政權ではあり得ず、又その後も革命政權たり得なかつたことは歴史の示す所である。従つて「單純資本主義」には検討の餘地あるにしても、「單純資本主義革命」という著者の基本的規定が誤りであることは明らかである。

著者が最も期待した小資産階級及びその政黨―特に汪・陳兩氏らに至つては、革命を前向きに推轉せしめ、氏の所謂ブルジョア政權がなし得なかつた「打倒帝國主義」を完遂し得なかつたのみでなく、日本

帝國主義に國と民族とを賣ろうとし、漢奸を以て中國人から稱された事は歴史そのものが教える所である。著者の視角も又誤りを記している。こゝで本書の序文に於ける平野義太郎氏の見解を紹介しよう。

「もとより氏が本書でとる所見をすべて是認するものではない。革命の歴史がすでに明らかに批判している。」との様にか。「こんにちすでに中華人民共和國は成立しその大憲章たる人民政治協商會議の共同綱領、中央人民政府組織法第一條は、著者が長年とりくんだ難問題、革命の擔當者は誰か、歴史の進歩を妨げる障害物は何であり打倒さるべき舊支配者は誰であるか、そもそも革命の闘争目標は何であるか、という根本問題をつぎのように解決した。すなわち、この國家の特質は、労働者階級が指導し、勞農階級のかたい同盟のもとに民族資産階級と小資産階級ならびに愛國人士を結合せる連合政府であり、帝國主義に反対し、官僚・買辦資本および封建地主制に反対しそれらを打倒すると」

もちろん著者が書いた後の歴史の動きに

書評

よつてのみでは本書の正しい批判はなされないだろう。本書の根幹をなし、骨組となつてゐるブチブルジョア的立場そのものが批判されねばならない。これが本書への批判の一つの緒口だと思ふ。然らばわれわれは此の書から何を興えられ、何を學び取る可きか。平野氏が序文で指摘している優れた諸點の外に私は次の二つを附加したい。先ず、すぐれた實にすぐれた中國社會研究家であつた著者にして犯さざるを得なかつた誤りを克服して、なお今後より正しい中國革命史が書かれねばならぬという高い教訓がそれである。その際本書はそこに取り入れらる可き貴重な資料を提供してくれに違いない。第二に、本書を通じて中國の民主主義運動が如何に劇しい闘争と革命を経てはじめて進展したかを知り、その中心問題が何であつたかを反省したわれわれは、それを據り所、出發點として、過去數千年の中國の歴史がどの様に發展して來たか、云い換えれば、夫々の如何なる歴史段階に於てどの様な革命を持つたかを改めて問ひ直す事を要請されるのである。これが中國歴史學徒へのこの書の興える教訓だと

私は思う。
(昭和二五年一月日本評論社刊入る版四二七頁五五〇圓)
―里井彦七郎―

著者 橋本洋一郎
ハーンシヨウ

世界史の岐路
THE "IFS" OF HISTORY

價 ¥180
A5. 200頁

事實についての正しい認識は勿論必要であらう。だが可能性の上に立つた思惟もまた歴史の正しい把握の良き助けとなる。一とパーンシヨウは言つていゝ。歴史愛好家は勿論一般の一讀を御奨めする。

大坂市東區南新町一の六

教育タイムス社

振替大坂71920 電(東)1362